歳旦帖

知足書留

中村俊定文庫
文庫 18
63

宮城縣立図書館

△寛安五辰元日

世せいの人の君とまてかのやとの春　長頼卿

風鳥蘇　き　鶴の巣　卿　正章

腮の原月のようかくかきて　西武

同

今年いとふかの母をとの原今年うの春　同

命を延原酒　長頼卿

仙境もつくもう山の菊見んとく　西章

同

十二子の梅ゆひらく年の春　同

中村俊定文庫

霞八郎乃ゑやう　同か　度　西光
其ゝ度数度風を　改て　長発

同

花菊亭ゝ考例　去年、今年の其　良徳
君子の徳や門の　其うせ　友宣
匂ひ其梅花ゝ物屋と　ゝ　友こ

同

盤石とちんすれ不御代其　同
御家のやう天の　拝衣　良徳
給原風を彩ゝ教ゝ　すませて　友宣

同

稲や穂先晴をゆつる黒民其　同
治家既を告家　鶴日　友こ
幸如へ家古盤ゝ考家　良徳

同

大臣御方とりゝ家七歩の御意小　住田政信
銀行も松ゝ国ゝるうさ家　梅花宗利
繁代や西川ひらも二家其　日貞成
筒貴ゝん姫ゝ星て其　高瀬冠雄
野ゝ主や新代毛きゝ西辰ゝ年　清水不存

新春の御書の都ぶりやうたう見
書初やいとふるき春の海　良徳子十歳　良屋
都ぶりいとしきはいろはかな　日十歳　良清
△第五　就癸巳季歌題　重和

れぬまを時まつまちは鶯の
うぐひすを竹ふもとうぐひす　長頼
たふりふる雪の枝の引さけて　正章
又　西成
今日は辰の日はつせもやきのふの水
はつはつてのいとはたのしきの事　同
　　光茂

歌ふり見えぬ隠家の花もふし　正意
又
ごいふうぐ守りや　地祇（リニハカミ）の長
もとや　光国卿　ふもとの海山　同
海ふ高いつまも嬉　さきふり　西成
又　光茂
心高く常盤ゆうふる年数の松　良徳
徳例めぐたまくこの　ちんの奇　貞成
雪を引琴よかすみとうけ指て　貞利
又

うさ家作は徳や義子は作しの妻　貞利
九よ之言のよ[illegible]　孝家　良徳
塩は[illegible]　貞敏

又

書初の詩や吉五郎の子作乃妻　同
之言[illegible]　ひらけ亀乃絵屏風　貞利
寄の花の御殿　うすくよ　良徳

又

つれ立や吉の仕復も吉乃妻　宗[illegible]
年も立つへ家の三つは[illegible]　立[illegible]

三十ゝゝ一度ゝゝ立　吉[illegible]
門吉乃千代は百代吉たゝ相　重[illegible]
年徳と[illegible]ら[illegible]すや[illegible]吉　良固
屠蘇酒はもゝ[illegible]移んの妻の妻　政信
火ふゝを[illegible]へい[illegible]　[illegible]　心西
去年ゝ吉て捨　や門乃妻　友三
書初乃家は[illegible]や加せん家　元晴
立ゝ家年は矢車乃ゝゝ　恵[illegible]
あせゝもゝよ福菊は四ゝ相　元信
大ふゝは吉ん鶴日の茶人乃　忠久

花やくや年は頃なるとすゑ縄のたゝ世はせやうかう
世初や幸よやとゝはれ神恵
菜子やとゝ鶴のこゝもとに家春
年ぶハ水きたゝ下れ礼儀ゑ
世保さや年乙年の頃ゆきう俗
桑角ゝやとゝ鶴常の吟し声
陽ゝれ法利の酒うゝるかゝゝ
青海のうけ法ほ四方の春

立甫
京都
玄札
未得
定貞
正文
宗利
祐数
令巾

△ 義應三 甲午 七歳

いよ年世乃丸し乃ち雑煮の道
ゆゝうゝの名をゝけし事
人を好き子の名ゝもゝ
みもひゝ侍数心を

接とめゝきをゝそめいろ紀春
ゝゝふゝ吟ゝゝ梅の一枝
西の剣けんけんもきハ言解て

正章
安静
季吟

又

音旅ゝき世奇反歌も体兼
玉をゝゝゝいいゝの和春

日
正家

つくるやどにうまれぬたのちん　安静

又

名よそにきくやかの花の春　同

きそそしめよかの梅はいくえ　重吟

のんとうとふとかきいはの南のおとなれ　正章

同

中西氏

敦堂

智さかりきれ金是ゥえ高家

春ふれりゆいナ　五　重吟

名殊よりの花よ新やくへぬくん　正章

同

為郷立かとまりや　不老つ

砂屋藤はかくるこ立やまうすみ

末の鶴の名もめくみ所まで花はまで

ひらくまり作はあるまるまるまるまる

海を上くれ者やあ面ゆの春　乃弱

年よ立春のたやアえ

ことの葉はやはやはるる春今新春

名よたやそもゆ城の菅野去

海ゥや年もむまりるくらの代の去

天地人も春すや今年三ちんめ

安永上元年刊

菊象

一滴

寂光

春中

高野

梅賀

中條門

宣

去地了去

可新

俊良

諸

正信

高知

恵俊

山本

重吟

俳諧

むかしの人はめでたの
福徳や寿よろこぶの国の春
宮の宰や侍る　ふる郡の春
ゆるゝと年たちとる井の郡の春
上下や元冠中とし御代の春
今宿をもりやれ春の一るの年
れさゝめたちふも春の初れ
あゝ玉をゝく掠の春
不老門ふちけも国も年の年
元日は天下一云の郡れ

桃山天子
芭蕉
永宝
河内屋
正量
大伴
正盛
猶可感
上野紀氏
世能
今井九郎
心月
正二位

めす屠蘇を君くゝれ
春の日やとるかゝ年もるれな
三界やけてをふる年の年
世の中はちて狂ふや傷と市
とふれはちとおとるや門の春
門の雲年をゝそめたれ
出ゝ二巻むすれ郡の春
門松を立ふ市やせいくゝ
恋や下心ゝ尽ゝ
去やよ物のをゝしとをゝる年

河内屋
正量
桃山
仏師
清七
土
荻原作
三伯
泰
仙蔵
菊屋

それもとをいとこ年経年　桔女
年四嘉をいとこ年午の年れ心ゝ
むすばれて末永春の年れ間まき　正孝
　　葉暮を所ゝ新前ゝ
春ふまて歌きこそとまりをとは　同
萩のゝもゝもゝしてもせちふゝ　同
△第廿四季末ノ元と
年徳や　佐保姫ゝ　立ゝ　真室
こゝろもむ月をいとふ　象人　あ野
こゝ海のうゝまひまの物ゝ夏をゝ　季吟

つゝかきを八まんこゝ岩田八ゝ　同
そのよしいゝの名を京都月　四季
刀根流ゝさを七宗よりけつまゝて　安野

又

え方ゝたゝ川やさゝ泉ゝ花ゝ雲　同
ひらひらゝ梅乃麝ゝ尺家　宿
雪けゝ宮の乃松川しゝ雪ゝ　季佐
　　京宮
　　四季ゝ水のゝ
　　ゝをんゝ
信濃乃国ほゝ川まゝ水　ゝ野　同

人日

今日芹やつみゝ人ゝのゝ人　同

門出やふるくなりぬる
乾坤や立年徳の神風
万年や千年ふるの花ぶき

立圓
坂存
明乃

同
今日や蒙花ぶきみ
節分ふりてたき
九重武

西武
正伯

一面も花咲過ぬ紅梅
正左

同
粧者も袖屋の
西日収ふ
のとやうかれむ日彩ふ照ふ

下ル
武
伯

明徳や代〳〵ふるかゝ保
仁義礼あ利門
永き日〳〵ふおくまぢ

同
乃春う枝
在
武

又
聖代や花ぶんおい
梅も国家もめ〳〵し〳〵川春
面そき東風もふ川けき時ふ

福寿草
良徳
鳥兼
左利

又
穂先の白すへきうら白連歌
ふ尾〳〵年始とふこだん民
市北梅商ふ北ふ

同
徳
兼

千代をまつ寿もたけあるや松鶴
きけえ方ふつきて　宮　貞兼
鶴かけ舞うてゐる家吟て　貞利
良徳

又

君が代は久しかるべき賀茂川　植木
流れとなるは石清水　モンド水の和
年明るちてやふるせう芽ぶくら　政信
いけるいそや菱の花ひらかる候　友三
とそを敲て放ふや酒切さんの日　友宣
新板ていとふ新書はこのちの　正賀
元晴

妙覚寺金場
知足

子とせふをき吉書を今年初代筆
初口も京ゝさゝく飾ゆかれ
ゝゝしません美墨も加吉
出ふくふくぬんのの筆入の和
猫とも川てたゝそかんぬこの候
年まてそとゝもと川ゝ今年
初字徒ゆ入のんを御筆ひ
筆ゝ行や雲も丹ぬ子ひ
雪ゝゝて川も神とき多和
ちんのふる筆をふりきもや

良苗
良吉
則定
徳世

鈴冠井
良清
日市十郎
去義
信徳
宗俊
守政
元信

年と共に人丸の
ほすゝよりさきうく立やゝ花は春　江戸　卜養
こゝ迄こゝの処て共乃心ゝ　来游
大ふくは世上一ぱいゝ　宝既
去年よりも当年百倍の福を家の風　友我
門の松も立てはゝうんきふの春　人為
去たて乃ほうやゝ西ゝなんのき　政辰
こゝこゝ一枝やこゝむかう行　宣次
書初よ打やてん初ん硯文字　石存
梅も高ふさかゝる俤も国生地　友竜

△明暦二丙申元日

年徳の神やよろこぶ屠蘇　貞室
ゝゝゆゝ花ゝ庵ゝ白梅　安静
四年辛未ゝ同俤ゝ　李吟
蘆葉の酒はゝ玉柴の小樽　同
ひきたゝめ菜やいつゝ　宝
ゝ夜よ祝ゝ用を祝ゝて　静
頭長ゝ世ゝ加ゝ新子菜　同
せいゝゝ小ゝ　吟
澄足ゝ面の雲乃家門出て　宝

きえ始めるつとも遠し　石山寺　令徳
けさのんとうとのく　京の代　宗貞
老年をんすう雪ふる物屋さく　負政

雅うんの世えすみきわとその所　同
きてゆく　家もたゆ　春　令
ゆるもれよ花ちんろ　ちすんん　宗

つくよ月腹赤の色やゆ空　同
故は海老もかく原蕗　町　負
花の近江貴さく　行　令
雅宴もうやれて結を門赤松　西武

天乃ちくみのひらく　梅の枝　正伯
雪の色をぬるんとし糸ゆて　西在
小神さやひろゆ　ゆ　日　同
うたし加ゆ　給ゆ　光　西
曲れ流の家をたの　正
裏殿きかく移て三井寺外　同
民も長宗き　文　学道　西
花を咲た大和おとと自孫　重頼
世や君よひろれて方　縄　長雲
きをとふくおかれの　松

詩

題の友を桃の節句に仕かまつる義

書初やちとせの川もうそ寄て　大和守

琴も唱歌をかなでたまの声　同

年ちかう唱歌をとがめ　安定

屋やちも末をわう　春雪

今朝を家ゐもむかふ菫草　同

ちとせ川池は水のとけ深く　立軒

動きなき世や盤石の月　安定

めて大木乃　春乃　朝花　梅壁

さかう春たちなと陰よ酒屋て　雄色

平吉

去ぬる十寿をうや門のかたり竹　雄色

ひろき家ゐハ　えう方ハ年を室　平吉

一数や未盤石の春ちかう世　梅壁

おもしろや春の陽気ばかりなる　平吉

大郎月とは多ゐうや　梅壁

花のえと梅を書既　雄色

大坂花

中和ともきかめて立やとて鶯春　桂時雨亭義陳

三笑もめ〳〵すに一百ゐう　西久住

さる乃去き指変ゑ　今ゆ志ゑ奇住

法師や元はるかに世にきこえ
学問や学こう法も多く
古来よりこそ千年をへぬる
立ちぬせしあとやうつまき羊徒

第三首

迎ひたり月日や年は矢の俊　同

△明暦三丁酉元旦

春立つ世は海よりぬ　うすみどり
うたひ初めて　春の一さく
老宗さ新　新しき風形みて

尼崎宗清
仲為
宗周
兵存

身室
可教
政信

元亨こそ年徒らこの海仏分
侍公の作えうう多七多三縄
高作り修多の能はさ延て

稚

今新いふ実ふ世宗や新みう
左和春ふ　菅丞世　山
風海新池の多持いてけく

稚

同
室
教
日
位
宗

第三首

賀茂の神さあらしや年は若　同

年の内立春
春も近く梅の花　梅子をやはる宗
五ぬや年の内春　同

春盲

かさわ行のよう世の中の文の様
ぶんぴつや蓋明らく今の世の様
元日さきの俤よそそあり例の油煙とおぼ
ゑ　　重頃
正量

初まるきく　雲は
おほきの芳家の園中家中
春ふは何もふさまいとへかきちら
第五をとりた先　立原大ふく
あるさま梅の花春を酔まあ
年あは同お琉球や　の
二度初ゑ　川へ十年家　書

元方もゝやふは磯石のいとわさい女　限定
春もふ舟も立家　小刀　是雑
船ゝ家俗ゝの芸仕ちつまて　室
日ゑん春よゝ竹のかゝ孔　久玉
清さう雪よ　庭　白　梅　春雲
鶯は文字さへ対ふこゝ　ふく　室
八ゝ年ゝゝ弦笛よかゝる毛詩の序　寄雲
見北御　成と　書ゝかゝ家　門　是雑
四会家立家　拙すゝのとかふく　室
四会家立家　歳仁　祐孝
七ゝ酒は三献蔵北　祝ひ祝

上巳下元のとぢかか　菅　是雄
花の於屋うおもてうとんめうく　貞宗
寄るさの玄旨は恒の於なみ　正武
我と　男　いとひめる宿　秋孝
世力ゐとて　はうちうみく　室
礼儀や雪の月初寒食年共去　一滴
大石平　かさ弓　平岡　是雄
つ屋うよ庭の後梅白ひ第く　室
又江戸衣
茶笠作の老よ大ふ〳〵やふ〳〵　未得

かたつと平もまるるの大和絵の　玄敬
書加や寄せ物とそ　ろうえうう　立志
迎文もわうかた海年　玄　俄家北　可入
作は野御系は他やうたひ初　未隆
画岩は写や雄未孔　わはと　不孝
学はふの初雪やさいたん奇　玄礼
松ちや　すちや　雪の四方弟　月　令巾
我門よ子弱ちへて　やかきり　縄　秀栄
蓬莱や長紙とり　川　書　初　好永
うきそめはうり西を年の変北
うう春とかきるや　門　のゐ月金の

破ぐるまで矢ぬ先の雪
立園
逸もせぬ雪のうつふかのまて
生重
遅迄乃鈴の鳴く
宗立
新年や古きもの問ふ雪あり
同
去年の暦乃新例
同園
祝ふそふ雪と又見せく
生
書初や時よりひらく
同
ちるとおもふ雪のはなの
宗立
三味線のうら音雪とれく
立園
書初やのとけき雪乃花の春
西武

ちるとせまし
粧雪
正伯
山家ハは海生の汚も雪きえく
西荘
寒ハいき形　もせそ　れとこ
同
今形は同わうい
武
稚
ましけて屋ま雪ふ数も物鈍
伯
俳場乃海の蕪や子代の雪ひ
同
ムりてまうふ山ひうえもち
正
ましまうう拍のうすみと砂ひけて
武
年波のまぬ雪とまれや宿雪
重軒
ん方の椒よかも原雪
定治
市町を照みそまもれたて
信雪

這雪や謙信殿
主軒
主治
冏雪
軒
季吟
可吟
則常
元睛

雪も今年はいつかちるの風
川の水はいつかちるの風
春人や花と大雪もしかるふん
雪とたて陽や人の乃八重
かつたり　風と雪年徳の祢
雪の舞たるを真ふく
軒
まつたつよ年つよる花乃春
光乃陽(朝カ)乃もたてとそまり
他境の雪すみ乃立つへく
我こ所好　つかつ　今年の春

吟
令
則常
謙
吟
令徳
元睛
赤蔵
友宣
徳
睛

書初
きひこ神とこのすく
梅の蕾見ふこそ年つ雪とそきく
雪もけさ行き川まこ立てそ年
律の新つのうこひきの　琴
女竹　梅風ふまこ
梅や　梅もこいくきし川氷解
梅うえ方ー　つ雪きうくし　す
双閉よひくこの春　弱篁
富士好　かこまる雪やひのな
もこ　野と久氷ふそのさうき
柳つこ川もとゆひ　首尾なのひく

例を学びよき文章の師匠は
明く十五夫そ百人の児
梅花紅梅月よ
京まして
大阪百万民を
なくたまる此年
なるまま
大阪元旦
新年のこと葉はふる年御恵
仁徳の代く健やか
去風の今新うて
えとりやなりち人すく

冨宣徳
あ鶯
梅壁
京乳
宗因
竹去
宗春
久蔵

地種は常そ書ふ
まやきふ立てこ
大体のこ川の初や
去ら去ふ道よ
大ふやなる千貴
瑞陽う陣陽う川
破ケやうけて
きふとりへ
かこうこやは
時やけさいえ
杉田やふと立て

地蔵
珍也
保友
竟朔
仲丸
知貞
秋去
東輪
一雪
三政
祐足

宮やうにてなることを今新出来
寺にてけさたはうすのこころもち
一つ門のまもたれもわれ所
こゝにてなきそめの老武
かき絵をも作てふ文字はうに
まはりたつたり長ゆ姫
かきをする家やんうこさう
古年はとちへ陸奥
書初て何かなきやとを年
新年は罷かも取ぬ時作り所
山くやはなを乃かきまつ

伝覚任
和年
同
如安
元知
俊秀
可令
上京
重光
西蓮
吉連
宗青
重政

何とも此度の為ことこと
元方郷中家をまれ弘法書不
中を宗ふ帝の一年はうにてあ
年徒乃条孔る年
三十日
ふこゝのやの今新立西の
はもけさまそいの是おれやん
ふこゝやとれ立てうりとれと
青帝の四親王ら依保姫御
かけ元ふうあ うくは 帝
花屋ふ立うこうこと緒をさて
三斗もて寺と成ゆ 三十日

貞次
光保
吉徳
安政
中成
治元
長吉
正孝
義八
貞室
義入

礼者たのしらふれうきわのうち
うらかぶきり拍枝霧して　正安
三年　はらえびや　放つ門雲　安嘉
雌雄の霧の　長宗　恵　碑
徳軍　ゑ　へは雲　のひまより　て　恵
門雲は　ゑ　も　雨　ゆいるひう　那　室
大ふ　は　菓　ゆ　ゑ　ゑ　ゑ　年　生敬
雲の　れ　ま　の　御　八　御　発　是　室
年　徳　の　ひ　ゑ　は　ゑ　方　呆　敬　室
大　ま　ま　も　の　ま　ま　敬　穂　一　正安

白嵐　ゑ　も　ち　た　ゑ　門　ま　て
門雲　や　か　ま　ち　ま　ま　い　も　ま　信貴
う　た　ま　初　は　面　ま　た　う　ま　美人
ま　弱　の　為　ふ　と　ま　ま　室
ま　や　う　け　て　ち　ま　ま　鏡　体　室
と　ま　た　よ　る　ひ　ま　ま　ま　神
花　ま　け　ま　の　門　も　ひ　ち　か　ま　恵
ま　ま　ら　け　の　よ　移　ま　ま　ま　恵　体
ま　ま　ら　け　の　よ　移　ま　ま　ま　恵　室
御　調　拍　て　い　ま　ふ　年　敬　可　室
四　牧　と　た　牧　言　は　う　敬　て　み　恵　室
御　家　ま　え　す　て　付　て　み　て　か　ま　水　良　後

中世のひらくも梅のこずみ哉　宗頼
春雨や天竺つゝみおれいもち　貞利
いなびかりくむふふ天竺かな　重勝
ひつゝむやくもらぬ法体のかゝ様　市次
萱草の花や千年今日の雲　六女
いくまとふれた人の影は苔の花　喜俊
年の徒よつまそやもきかさ縄　一之
すくもやはるゝ代のうたう竹　玉青
まふ春の子代の蛇やとまの年　貞甫
年徒うけて拙むい方方那　久松

為をうゝ夜よりひ尽こ為ひま
陽の年乃頭や辰ら
大ふくは答よ陽のうくうゝ為
年徒の大麻ちやかきうう
ふゝや先に放ふとと
歯よ川くは年とうもち新著ホ
年八徒もうう〻の体命い
詩命ふちうゝ年三つ蛇
かゝ行や依保姫君の簡雪
この花のさく辰ちゝ塔帝月
辰の内やひゝたゝいゝめ

為依　寿安
宗方　宗流
重流　増也
弘正
正信
別原
一王
宗流
為本

大ふくをたてまつる祈る菓菓子ハ
年よりぬ祈祷やなりぬる
年も立て来るは今日の夕方なり

△明廣四戊戌年正月

むくだの年とせふや老乃春　丈机
長寿をいつ祝ふ乃春月　未得
七種おみくじも小松やそつ祝の営業　同
我も年とそつてかまふ晨蛙　同
ひさしぶりのちりまきや神蛙　来孫
去年立て家ものもなくたまるなり　卜養
年波や代くと流る乃ひろ　立志

去年やふる葉のちりぬる大祈祷　常市
かしりれ人くかくまこそ春の門　好水
寿限や祈てあるハの松乃足　和代
きふそハつらのといそふくしき　未得書　好水
君のまてめきふるあやふ葉乃　ふ考
つ足きのうも祝ふ父やかきり松　一京
軒のつまに男（ヲトコ）後ひや餅　縄　得意
初春の入門の祝やしくいつあ　こ海
出そめ元下一枝の粉紙水　すま
きふ家てとてとうそ門の松　昌祝

京衣

三井寺にて四郎おとゝ地ゟ
面ゟ一や ゟあがる 門
さゝ ちきを 苗代水の 後ゟて
雪もけさやゟ ゟ の 稲
梅のきのこえ ゟ ゟ 前栽
本俵 ゟ ゟ ゟ 宮ゟ 浮て
人のゝ 親ゟ ゟ ゟ
砂ゟ ゟ ゟ ゟ
孔雀の 地乃梅 ゟ 光 開けて

皇室 可頼 政代 政代 皇室 可頼 可 政 貞

山来堂 年ものゝ ゟ や 日
行年の 過きゟ ふさけ ゟ の 坂
永 ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ 神 春
ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
田 抜 ゟ 河 地 永 ゟ ゟ ゟ
おゟ 故 自 の 帯 ゟ 果 ゟ や 三 ゟ 日
蓮 集 ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
紀 ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
降 ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ
ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ ゟ

西武 西伯 西荘 西伯 西荘 西武 年吟 則貴

西日やこぼれ山の花咲て　元隣
四つと来ぬ春もやあるの頃なり　可全
秋和すとなる東　秀吟
ぬれ和すのことし　接遠　則常
井筒かつの　元隣
さくら和ぬ花ちれやけさ花　可全
梅の花開く　秀吟
雪い間さ春ふるそうて　立甫
春ふかまる云信さしまものと　宣唐
花春の夜ふまし　常辰
食すへき鶯の音　拘つれて

鶯鳴ふ雪の紅色ふ立の花　同
のとうる仏世ふ　天乃　傾ら　立甫
ふも木も自然ふ花の時と　立遠
たゆすゆるは新の世継う　常辰
先うゆとまりうしうしう　縄
仏枝の花うつをもたあけて　立甫
風和やかのそたふ　立甫
ふうてふふ　新人　立方
ふそうふ　立遠
常世　為や老ふりとことふ　立方
雪ふ　雪ふ　立方

蛇のはなちおぬ垣根かな　みて　　定供

卯杖のねとめつらしき手始め　　同

唐ひらけ見えゆる　吉日　　定方

梅の立枝思ひの外に言ひて　　季於

八百万よひらの神も吉書哉　　令徳

唐とひらきえ方見家　宿　　令数

ふめは花立る茶碗とりまて　　由豊

精初や坪内の奥義三千に　　同

床のなかとまりかし立春　　令徳

宮仕今すき新京掃除して　　令義

山鳥のをさへ尾なりしかさり哉　　同

露の玉矢は千代いさふ門　　雪

不まき行るをめれ従者は和日ふて　　徳

其の春や花よきまきぬいろよ色　　梅室

ひんつしよわも来ぬうたひ哉　　雅也

横この峯かる岩の雪消く　　年吉

若菜きや新春をとむらうちいたひ　　同

市ありし立そふ門やん春の代　　梅

山も里もかすみと春もありきん　　雅

書始をとれハ拙りなか例の吉書哉　　同

詠初かしよつこ　萋　　平

但みのくんの中箱宮き夜ケ
ち姫ゑ苔苔北佛佛の雲　梅盃
鮒もそそ川くかんん苔苔苔　江尾
不老川の佛宮や河しし苔苔苔　老眼
ことく役ゐゐ苔ふれそ　清次
板へきふ世の中とそんん三ケ日　恵作

寄刻や一花ひらけて冥土い　愚水
冥の苔や苔を　苔門　元知
老宗も御笠と高く書上て　清房
十八の君老せぬや子作の雲　同
然とそそへくく砂　苔の酒　愚水

寄那の後乃ゆ河やかすみ　元知
冥の苔やかゑに　きふの雲　同
大ゐくひする庭ゆん稲ゐゐ　清
佛苔長とゐくかんと縁て　愚水

△万法就春已玄元

子星行苔元一歩北河たく船　愚水
まり冥のとんそそ北　庭　清房
書も苔き梅ハ形猫ゆきひゐく　元知
松狐子ともよ年もや立ゐら　同
まけて吹ゐゐ御笠の東風　水
子屋そも姫のなちゐに伽藍燒く　房

今日とて年と月とあらたまる
春の化粧うすきさくら山 周 清房
書たる書のそしり雪消て 元知
門よたてん今百年いきの春 水
あよ枝りく人ぞ 正周 貞室
永日もいそく昔紙の吉行きて 可頼
年やりまうけたる歌ものめ 正信
和琴は楽のかうなる川柳 同
ひらきゆる書は花ある花柳 貞
花見もまつ弟役ゆ立枝ゆ 可
同

シリクベ縄 ヒ昔ハ 九重ノ内 ヒ昔ハ 結ヒ縄ト云

郊ひらしき国のうくひ西
解したる頃根の胡蝶書は
まうとちうあるあるとも加まうう
くもらぬうけて休のこの見 係
国民もめてたうあるる花さくく

シリクベ縄 外書ヨ云七又ニシテ 陸テ是ヶ先通サヌ少ニ了ニ

正 貞
西武 蝶白
正伯

黄帝のうもんを入や 御菓子
春立うしうしき 弟農
句帰よるれとうあ菜とうけて
大ふく対菓もゆつうたよのき弟
ほふのうへ月一のする 士然
お月うあの月よ新ふううたせて

同 西
正 西
西

河内国より毎年献上仕候てそれ以後のすみの春
雪の年ふりひらく梅の枝　季吟
除すゝぎ柳も用ゆる面影　之様
神垣よ立ち出やまきてかゝる雪　可全
雪もこゝ所も春のかゝり木　則常
工作は君もたゝへて持まきて　季元
大内は高砂姫の雪笑ひ　可令
ふりうつると松の芽葉　則
海内の春朝つゆ　季
君の代や海とたゝへて神代春　梅翠

この根ねを持て花を松の木　一雪
行ハ書く梅ハ雪と枝のひて　定意
花ハ咲方く年やゝ春　同
西岩尾ハさゝれ　右梅
池水ハ流れて　雪
書和の筆もぬゝむ　同
むらゝえ方よりくゝまれ声
市人や掃てなをく雪ぬん　定意
　　梅翠
　　東雲
銀とちまきを海面の　京室

元日　大仏殿法花　高橋

きゝ海ふかりしやたゝ京目

鹿屋院主　坊

つちはとのゝりロいきくゝひゝき

行屋中納言九

はるかひゝくやつちはとのゝ人

きやとゝ法も万梅花齋示六角次

伊勢人　是四郎坊

釜ゆやいせゝゝふむきの春

年ゝりそいの字の清ゝ関春

年始の袋をたゝぬ　きふ城　六房

ゝゝのむゝ　慈仙

ゝゝ拍ゝや一ゝすみ　宣預

ゝゝゝゝ世はゝゝれやかゝ縄　宣供

むゝゝ用いゝひゝゝゝむゝひゝふ　信成

徳初やきゝゝめゝて神ゝ我　自訣

ゝゝゝゝの後や二月ゝ用ゝ　宣物

大ゝゝ世おや自在　答　泰雅

きゝゝとみゝの後やゝゝゝゝ神ゝ世　江戸六　来浮

越ゝの袋とかゝゝ歌ゝ花ゝ世　卜養

京ヵ　ハツ　鶯ゝ　枝ヵ　木　や二世ゝすかゝゝ鶯ゝ　方札

大海留かの京さん
よいのとしより作るや　てうす下　吉孔
江戸さ様方様御元服時
苔みとる京ぬる作るや　作〳〵　雲　昌孔
きは岩尾よ苗のむす　御
国華文日　備後ふく　道
四の字や　かの作る京ふの花　雲
梅山や　作り〳〵　徳寺神　立南
文字ふし　さ方作る御作の雲　同
花作る夢　相棚の　うり縄　宝隆
志川〳〵と立やない　の年　雲　好舟
正長

きやの作る今新たちかの作る京作保服法
うき御やもきふのうと　雲　文　陳味
文字の　国カ　さ四　き国月のうみ　保　巻　宗休
四華　国よ作る作る　きの　立室　亨寛
書初の家　て下一字の　影　仲昔
可の字かへ　屋雲の年　雲　巻云
年四は扇　とすく　雲　宗垂

△万治三南子年元旦　京室
き作や保の後作り　弟務　可頼
雲きいる　移のお月三東　正信
移徒の作　後式　形
ぐすまぬ屋形みて

又ある人は是者が考ばかりなる
門をとがめぬふ家　百姓　正信
賜篇よ書うく寒の亀のとけくて　皇室
世中はよりねのをもやもりれ　可頼
ひらき初たる書は義　町　同
山里の花をこるうしまくきて　位
ゴマカヘルトハ草枕ト又青むをいふ　室
ゴ陸うたる家やうせれ移んを去　未詳
ちつをふ大かくたりをを流茶ル　古孔
きふうや大和の年始　立志
試義よつ移よ野ゆ山去　為定

老妻や子ホのかとのまつ　春次
書初や一筆うれてを　徳不卜
書初や筆りの下よ　一文字　京丸常辰
時をとちたてえうふ刺　孔形　和年
なのもよ儲と老馬よ結今て　友貞
一天の月や西足の神の去　日
夜のうちうけてかた亀の縄　辰
竹垣や老宋き家れを重ね人　年
誠や年の酒ふもわうをひ安　日
寒月や蔵て重ね自む丁銀　貞
乙上の板をを屋うよ市立て　辰

[illegible]　立甫
[illegible]　立欽
[illegible]　立政

[illegible]　同甫

子[illegible]の[illegible]　欽

の人は[illegible]　同

[illegible]　甫

[illegible]　泰定

人心花[illegible]　為親

門[illegible]　[illegible]　定親

[illegible]　福山[illegible]　定良

[illegible]　西定

[illegible]　親忠

[illegible]　定之

[illegible]　京[illegible]　泰

[illegible]　三辰

[illegible]　常長

[illegible]　好子

[illegible]　[illegible]子

[illegible]　本安

延天の君〜たちや三代の去
景雅や移て行ゑ〜る年は去
てう古もるよぬ移のとや立つて
書初のお方舎家やえ方たち
花ちや上下京のきそそ光
年北天はそめむう春は色
書初やゆく假名年は大和方
元日や家よりものぬ九も風雅
併花や兼ちき軍も花は去
年よてそうへ移ほひの移の門
後よたりまや浦京節は徳相撲

仲昔
久佐
茶徳
無恨
永田
正陳
業利
後之
三近
立注
恋入

言秀
玄隆
正長
水巌
常辰

まるまるや引〜〜雪ちそめ
郷後の梅や弟ち花乃去
昔よりを人〜ふん〜〜神は去
書初はち年よかるるしろはル
ち業家〜〜のうぶるやいもも福尼

伊勢山田八木但る寺 景下 鈴尼家直

○神道山王百枝千枝(エダ)の松まもも同家はつ
日吳田老前当源鈴尼義改 知事のかゝえき
春の
美花を(を)ま移ゝや年もなけは神
ちゝん
元日や酒とゝ〜のの酒ほ〜なり

大八 畠田松笠元之 日吳法左吏 仰仕 なりけ ノ 神 も 不 〜 何 ゝ き も 時 五 ち 之 翠 ポ ノ 日 ハ 也 恋

同一祢宜従四位下荒木田氏富

○君か代の春も初と天照日もひかりそふく峯の松風

登る今朝ちからや　日の光ます神路山

さんかい
三かいも春には霞のまつきかな

同権（権カ）禰宜従五位下荒木田氏守

○神風や下津岩根の宮柱さしまつ今日も春そのとけき

さんかい
年もきそふ孫はよし立や玉乃春

春たつと見えもきそふやなかゆし初　松木従理

春来て春やおちつきらしきふ八千歳　条彦

試筆し先ゐ筆やめてたくも　武珍

同胡候了津人　徒橋栄流　是非子

○春せし今日便初る春風も万代いはふなかの〻　東京

のとけくもたちやことはの花ぞ春

弓矢の家ふや色くの稜條

いせこよしなけてのとけし神の春　従六位栄清　是非子也

△万延二季辛酉之元旦　貞室

ちとせは行つける代乃かきり縄　可頼

この安玉はいつも　正月　正信

幸ともの春のきらつきのえあて　同

年経の春（春）居やこ家福　め祢　宗　貞

鏡のすみも松宋の家

ままうき花のかほしとすへまて　可

天のの山ちはてのうち初　元方卿　可頼
飛鳥井殿のとけなる梶の葉　宗定
書面のいそくも秋の上まちつて
元日子日ちりそめて

かすみ立やそのの日よりひろ　季吟
野辺よりかすみ山のこしもと　康吉
おのおのもつれ立雨丁寄よ仮て　元隣

ナサカリトハシメノ内ニ面ノフルヨウニ
朱書
来ぬ人は立川そやるけたか　可全
おもうをせしそやうてもを天　季吟
山桜の時分柳風吹て　康吉

ゆきうるまやかすみも霞ぬ服たち　山岳水　元隣
のうへの雪はくもりもしてとこそ　可全
花を通ふ山の柳や宮ゐ　季吟
かすんで

雪ひさうるまさうふや年暮れ　重教
月をよろこふといきふ菖蒲　定房
山椒もそのまま花の宿りて　貞盛

たのしきやそをかの薬用　同
門ふい雪を形火　頼
作り花と鴨まもそや遊ん　康
ちの鍋　平竹ヲ十之
砂たて山雪まさへ　同

明てゐまはふせぞ　門の春　貞風
民の竈たまくさふりて霞立　幸彩
正月や人の三笑子の花つぼみ　僧中峰梅翁
まは礼老に先酒　春　安定
銀能はさんゆうにもし御うく　端もそ　定宰
発端の道や　吉書の筆は海　同
えんかし八文　蓬莱の山　梅翁
株上の桃も七宝つこさふきよ　あき
そのかみは春もかくこそ初めされ　同
あみより立　大木の松　玄宰
かすんたる日も御狩の時めきて　梅翁

かさねて天は御松門の雲　西武
蓬莱をくみわれけ風　幸白
いのちながきけふも重子一ゑを　正伯
正月は子を思ふ夢しめかん　同
川そに起そしむら筆継　西
吉例よ小田の水口清らせく　幸
眼すくに人ゆつき世やかく三條　法然寺蒲郎
読まれたてはふ教の子　正
二つの家めてたくも咲花よ　西
めくりふ歌や西ゑる年　東門主　思云
子のとしまて孝子代は雲　立卜

門くいかさ雨霧に眺ひて　正徳
世の人乃き海くりめ　発花枝去　同
ほ[illegible]てきやふ[illegible]年　夕雨　思去
四方白雲あすと天の戸おし明て　立ト
筆の海や氷ふくそ家の色　同
すふ日りよめ除筆の歌　元
雪のこ色ちくきて　思
今朝よりやい発知恵花乃去　新門　宣好
鳴ふ[illegible]ほてきもたた　清房
こそふ雪れ音の調子間て　元隅

門くのそきハうきもの春乃色　元隅
御代ふ[illegible]きてもやも　万葉　百水
去れ宮たちうハ[illegible]の　[illegible]て　清房
春とい根本い義の[illegible]こう那　同
筆ろ[illegible]むふ奇　[illegible]　雅楽
上下も朝雪の郎ま安庭て　元隅
俳花もきふはふ[illegible]ほ初子は　百水
え方よむふ　大夏の　桐　立園
商人は去冬ふ家の段発て　秋千
家これ仕安や吉原　神の去　宣釈
吉品

赤例たゝぬきめかけて縄　西釈
苗代のあと肥せきかて　泰竜
[illegible]や麻よ海　立歌
上下あるそのそすす　正月　知論
那きはもちすす連歌やおすん　立甫
[illegible]波はよ昨夜の面や花の去　古塔立海　宗周
南年の新の動はちすの去　泰竜
大はのおしうすすの面のそ　知論
蓮葉の山や清おの去蓮　宗釈
夏よ仙家やうつ海とその海　西釈
雪の去ふたり新や去今の春　西釈中

ふとき[illegible]やもちゆ[illegible]去去蓮
[illegible]つも初め去やちんたすう　好言
すゆ新猿のもちの河新宿　常辰
大ゝとのとけき遠よりよせて　和年
鶏はつ[illegible]能去[illegible]もち[illegible]先新　友貞
妻の古鍛もけつたの面の去　同
神[illegible]ん城よ[illegible]お仕は花あき　常辰
[illegible]朝を[illegible]ふ[illegible]後[illegible]事　和年
[illegible]ん[illegible]むう年徳の　同
立ち[illegible]妻のとかう新立　友貞
[illegible]年の春よりや車海老　常辰
[illegible]　宗明

もち梅、菊のかゝれし人々の共
ゆ移の絵や立て屏すき花の去
格式の二本や立て添延花菖
面や去と泥ゆ去ゆ面ら し青の年
の〻かすみたつ〻り共たり春共色
立去のうすみは花のさ紀て春
江戸京屋
芦山紳士郎も去つ〻のち東
姫松のあき京や御門妨ちり牡
ちや〻人〻彩年めつ去や幸陝
よひ月て一と せる二三乃 去

康吉
保友
定朝
杉浦吉右衛門
信次
京浦
兔

吉松
未淳
立志
加友

初春れ去つ子のかきふやたの乃
去陽を松ゆ去門の去
筆よ月去いて初め象去書ル
神去て人むふや八附の猿係
書初やわうむ〻さ紀の 硯石
牛をきるいゆ去き老ら年徳郎
香の二本乃去てんすき盛
火ぬきら引ゆ乃またかきり 俗
すて去ゆを引や郎ゆ去方 桃
安乃や 依保姫 君の三ケ日
うきて去ゆや 去ちと面中仇

好永
泰治
去重

一信
高浦

正去
小川

傳重

政猪
治廣
重安

子は新やいとふ文ふくお袋茶　宣義
桜餅もえんやや格子の内うるはし　仲安
かうち所と枝よ形むや志の去　光清
思ふのちめやや年の夜明ふく　正和
雪もけふや花初子　日
年のをやけふ伝保姫のむかしめ　重信
二年立ぬや　この牛丸角　江一
何ふ玉や冨ふとのへたる基地　義宣
新よ夢ふ拾とやすゆ猿保　末孫
同年元日連歌　蝶子
又そこ次今年ぬきもの　春　昌雅

昌陸　昌雅
昌寿　昌伯
昌益
時雨
十七度
大福
同
立甫
春

まもの色ハ本よ上ぬ方ふ同の松
ふるまれやきのあるや春花
年毎よ去ち原ふ白紙
年立てまもなく　もる武ふ
雪ふ多ふ　あるは思ふ
雪ふ去へ拾ふ去ふ　れまし
古今しもまつ立　和や大和平
幸国やつきとふ　ふ　氣ふ
俳花もきふハ小雪ふ初子の日
殺ふやれそふ中丸門の雲

△寛文二年壬寅元旦京都

皇室

皇室御しのまゝ梅はなを閉ことなく
むかしきとなるや明日　一月　可頼
梅の花咲ぬる例の宮まちて　正信
春とゝ御仕合元旦のとしの年　同
門よかゝる建長院元　大乗　宮
神機ゝ初つむ家内のとゝ内もて　頼
春ふる雪ふるとしの二七夜　同
続の次第　すゆ御所御陳　代
茶屋のゝ花は弱とゝ起ゝまて　宮

流まてゝとゝの矢ゝうん　簾鉤　同
今朝しゝ歌や年中行事屠蘇　立圃
世をなつゝとゝ人ゝ
門ゝへき茶杓　氷柱　友貞
元日や毒ゝの赤ゝ　女衣　常辰
花令の道は例　内膳　役　同
餅結とゝの御子ゝ　立南
年玉は多筆ゝとゝ　友貞
御前ゝうゝかゝ西日　同
根紙は花のゝ　の礼　常
立

誠實 ゆも花をかぢせら梅雪面
貴数深き宮の 梅ゥ枝
栄とかゝ孔雀とゝへ料理ゝ
かゝ衣裳屋こゝ八一ゝさ祢
方力析常をゝ 正月
元眼の座布団紙八光宗ゆて
時よ何ゆゝ方ゆ嵐もとゝ年
花ひらきゆや 川すき茶儀
は和ゥる尼寿の前ゥ 飛川けて
何ゆ角ゆと今ゆのゝふとさゆ花
ゝゝゝゝゝもゝゝゝゝ朝

可申 元恒 可申

破 元 同

可破 季吟 元慶

柳行さゝゆ寿の座ゥつゝて
蓬莱や寿ゥ年徳の神跡屋ま
ゆゆ宿ゥ殷ゥ伊勢えび
海ひさゝ久しいゆの地とゆゝ
去年こゝゆ道ゥ過ゥよゆや立同春
夜軍よゆうたゥ初ゥ春声
子丑とゝゝゥ霞ゝゆゝ明て
世ゝの玉も未みゝかゝ末尾ゝ

可全 康吉 季吟 元慶 可全 康吉 季吟 元慶 梅窓 安吉

幸やゝゝ海ゥ世て君ゥ去
年むもせの人行祝後計
賀の宮ゥ松と柳とゥみ入て

春は来いそしの今年もことしの春
すこしかすみも併つきのもち　梅翠
ひいらぎのそしの門に子は伽は　安重

めでたさもますます増て　同
梅木の花もさくらのいろのため　定
何の山もこの春山も春清て　梅

数の子は子孫の繁昌やことの　西武
子代もてはやふるの破て弓　素白
ふくもあるぬ長寿は松上て　正伯
たち鶴ふ鶴は千年の亀の甲　同
常盤とふもことふき　西

安力

宮風もうるはしくすきびきて　素
書初や紅葉重ねる花は春　同
元旦の日はひかりの盃　正
君臣の道はうるはしまねばなて　西

万年の万年第一万年家　定朝
久しき枝も花の咲乃　楽
入日うけうや春暮は似て　一六
菖蒲葉や蹴田の稲のわん俵　知貞
新蕎麦入て　同
口は路の根も大根　定
数寄や　家屋敷も大あかきり　六
同

ふるさとも今日はかすみ立すぎ
義方
連歌
去年の面影やこの影ふる
けさいまゝまも立そふる
俤花よりちるやふの春北面
ふるさとゝうしやもわゝやもきふの春
去年の面影や春霞
去年の面影ひて立や花霞
月の雪ふん月三の朝
去年いそもり今日北春
帰きて年ゝ海や花の春
一年の花は春と今影の面

去年貞
影

貞
之朝
蔦
榛
桜間
元序
元頂
清水
正長
市面
常山
竹林

春や子代のたゝ今日を初
去年ことし雨と中の春ふる

貞
影

江戸元日
旅の色をはめさゝ梅の花は春
ちるやふる神代もいなゝ姫もめ
にの嵐とふるひのとゝ城年
かんのゆもゝ海しし女や伊保姫
うちり縄や春は花とそ春
御堂をもゝてそめ月ふる花は春
春は形和りふて志ゝぬゝたゝ初
おせの湯よむゝふや門の春

上義
未得
千礼
一雪
朝雪
左雪
良度
大坂
逸

かきつ門を立あ川ふ那迎ふ熊山松江ハ下
慶初や上と宮へ部下ふ利　敬信
今年於八者穂みのきい祢のきの　加友
今彩のまや万地のるんなう　泰淡
佐保姫や女とまるる　祢者まま　武雅
須佐の本ら世界へ部ふ花姫　蟬子
慶初はふ佐国も部佐市ふ部　一信
ほのあや小ふまうや　ぬ日方姫　蟬子
屋ハとれま佐のまん年　姫ふ部　友下
まよふやふ比姫の佐ふり　守供
ちせの部ふや千代とうさふ井　長業

きふ立は二年深なるまま姫　義利
二度立や兄姫とふたぬ花姫　まふ
如来やなまはふふ代姫ふり祢　釈信
遠近の立きみそふき門姫　加友
及ふ先御礼知阪ふふ川の姫　知祢
本ふ春の道姫ふふ本門ふ松　範廣
先社堂のていと姫むやえ方姫
うたれ初やうふふうまふ方ま姫
八百年ふたふ月や　年男　松平日向
ふふ年とふそへ川ふ姫ふ　竹垣山城
姫ふや言姫ふのふ代の姫　保友

江戸浅草観音会

松竹世にはめくるれば掃みそう　昌程

三れ光の長寿を　承度さま　御

峯かすむ人来る　面をれて　玄祥

年はそれ風をかりて　まや　岩柳住成

連歌　きりの子日　四方来

為水の振江の清　清子　昌行

寿けさや雨より春の　さ　昌清

一夜明て天地ちよの　春　三井近次

×第巳辰長屋会

戸さくあや我面来ぬ代れば去　蘭子　玄次

面白もいとかりとは出来ぬ　同

書初やいろはにほへとちよれ去　小面

年とれハ流きこんろ　伊勢ハ一和　同一和

露の玉や萬年西れる代れば去　西去

雲井を之方たゆ引うすみれ　竹梅

子墨作今朝ハ一歩のうそれ年　彩和

土宮の年土宮の月雨りまきも

年と月やこれらつのへ月の年　存庵

松竹と徳利とうきも　不宋

瓶子門

佐保姫やむすぶの神垣　除か沙弗　一貞
孕勾は家たんちやのことく　西利
寛文やゝて法つ佛代の去　宮佛造栄彫心と
×猪田衣元日
調つゝ立や前尾陽ゝや廿去　毎延
後羅綿も結去もきて始め　可芳
誠爪立て一首の字やかゝ色　立心
為ふ　れまゝこと造栄やゝの　祖仏
ゝたもる年式の筆やすゝ　猪利
妙ふゝせめゝて陽神の彫代　一人
衣も人もいやゝきゝの去　栄之

鈴の形を新去の佛けいゝ形　栄名一仏
かまゝ竹も手黒川けや富の年　彫栄
春日明神の代よ去ゝ
まゝゝ去めをゝ彫の由ふ形　信去
うゝ去命けてゝふゝ春月　吉釈
みゝけて彫ゝや何ゝの去　同
書初をするやゝつの去命月　同

△寛文三癸卯年

元日

蓬壺も清の風を用ひてめでたき人の手枕の琴待酒はなし　貞室

冨士の山の花を巧者に詠ずく　可頼

正信

初春は北斗北つ星掛や金袁多　同

南窓の雑子八見えぬ梅の枝　貞室

夏方も今日は子日のひとしてて　可軌

春ふかみ　同

壺も高楊枝花の去　同

大ふくいとふ　火　庶の前　正信
出御よりもゆるもゆる水なけて　白定

年号
老の河　や先とる年ぬるれ河　同

世ちふん　百方世　ゆるや梅ぬ花ぬ世　同

数くへ多大臣に　梅ぬ世ちふ　同

年内立春　梅ぬ花ぬ世　同

梅は年のうちえうきふの春　同

立春やはるみの神の宮うつし　常辰

いく世の例とひたあうけり　和年

苗代ハ未の刻ぬ用意みて　友貞

乾坤や　同　春を定ぬ　むすて家　同

はるは　いつく年徳　の神　常辰

吉日をえらふ市　市ぬらふく　和年

世界ふ　同　雀稚子まて花ぬ　同

角ぬと声を　初ぬ　友貞

いとけなき小ふ　ふくひぬ　常辰

たくミかまて　春の面起ぬ　春吟

春ひろかる子せんそ　万年　春之可全
雪砂と度は業へまゝ　春利
同　康吉
年水や千年の春やかけもさし　岩雪水
蓬利ともなるそけぬ落ゆ　元儀
浪北なやんけ京柳の糸まへく　季竹
同　可全
よい春やゆるもろこしとかゝ　康吉
結えし梅の光らゝき枝　元儀
見桜人とめちゝやあそかん　季竹
同

はまの人やん今年も花は去　西武
試筆北斗は三千字　一文字　春石
長寿の天下泰平治まりて　正伯
同
花ゝそた抽よ心も年たとこ　同
ちゝとまいつゝ廣藤の古墨　西武
孔仁の手代のやゝよまめきて　春石
同
蓬莱のいく菓子や　蓬抽　同
露龍の代とかけ孫雪竹　正伯
今まもも白髪北斗風俗て　西武

すゝ竹て物たまん世そ為夫　梅盛
松もうけうよそゝ方　柳　安重
立市は夜さゝ陰と為例ゝて　定重

同

同おたきやゝまゝかさぬ笠　同
西月風ゝ雨させるさうき　梅
花衣袖流風そと旅立て　安

同

書初ゝ書進のゝさ自雀　同
花の作ゝをそれゝきゝ今　定
雪は松ゝよりつゝて春立て　梅

同

書初はゝ雪ゝ松からやいさらえ　大安寺や陰ら　重頼
宮ゝなけのちのちゝ松　住吉　重定
梅ゝ月と入て　和泉の国　定保

同

為水や人の心きゝんてもめ　同
え方ちゝとよ年徒れ柳　重松
夢も賀も雪あとちゝよ市ゝ立て　重定

同

きのゝ立ゝやこゝとそゝて　同
伍とゝわへも枝と風り梅　定保

雪や人家と咲てふけぬらん　宣頼

同

七夜のうい移ハこやいさひ月　今徒子 今留

一数ひろく列　ふ　とそ酒　春吉

心く徐まる家　はのとうふて　宗貞

同

古年ちぬふ江方山せ後餅　同

をの川と夫こをかけ乃家の戸　今

陸地形の長地寄元を徐ま年て　春

也はるまく山君といいらかきう所　同

加こきまか　鈴木宗長

大蒙はかるこ家面もかへまん　今留

同

ちひ佛ちもかこいわ連ち元ひ　仙元

元方桃ハ歯乃果をうちしき　落柿舎宗英

新宅よ先川ちてう菓とかけて　大伝馬町九郎兵衛 俊秀

同

四ちの毛ふは長ちたかたか　同

ち年ひはよきけこうれ　仙元

什と筋よ稽垂泉の長宋中て　宗英

ちはあけでなをなん徐徐道ル　同

旅と初秋と題して　の如り
其外雲とつの一口の俳諧に似て　似元
　　同
今日いつもひとつ書をたゞ月　破帝
東の雲生れことふきの春　文性
八重雲うんのむらいと増とちく　可中
　　同
起て人は其水くさい衣北　同
デリケイ
裝所なのもぬとも　男振　破
町人も待つれの花見して　元
　　同

子世紙ふ雪や本のお門の前　同
ふきたなりとやゆうきわ縄　可
試書も紙の海場所　撞ハひて　破
今日よりや百花園世界　輕妙
亭の絵めやうを山く　木唐
唐坊かもも顔の文字に似て　乗元
　　同
古くめの縄もや七五三ケ日　日
なりひらきとさ其外門　輕
鬼
鬼かとも見る彩場の雪とけ　求
雪ゆくけたや其外一面文　日

文この世のちまの色　春雪うし

花やうの呂を非然と名吟て　鼓仙

ゆうまやうくうこと　元隣

ゆうまは貧家のもうる春か　法紀

法人もちふの法師ふの毛か　友侍

年徳はうるふし　雪　常甫

新春の郊や万代のちめ　立圃

大見と二幅一対や　さうえひ春　吉泰

年はうちきえ方面むきに諸仏　可令

きのふてえ苗れしの如ちうち　富田氏　負明

是レハコレ次前ノ句ナリ

ゆきやこそ分もつれふの玉　大阪　定朝

債務ハきのふの剣　そ家ふ武　塙平太郎　保友

第ちえ再誕ちうや　ゆ　高比良大平　加賀

第老当

春とみてハ生てちうきとうれ　似之

見ら

見も見ずも爰世ふるそ変転　李玲

開ふ源よやひらきき寺門面へ　同

江戸衣元旦

開春は梅を開きや花の枝　卜養

家人の気力強ひやきそ始め　蝶々子

祝ひものよきしるしや注連縄　水元

東河之居住
松下そ貴賤すゝや門乃春　玄札

長いきのため猪とも花は春　未得

御代の春や志門りて書始也　光計

千代と河ふきき立松のかさや年の春　清隆

地ふくよし世ぬきとゆる門の春　友里

毎けおりく下一枝のかさは春　康信

春添つもや蓬莱のたいとこ福　安之

のどけさと春るや一天せらん勝　勝重

屈流とも屈神代も今も大鏡　明幸

蓬莱の山もかすみや今影は春　蝶々子書　山人

日と成き旅代やはのしなけ春　守供

東風ようこゝぬ千代や門の春　加友

松ぞわら子代をもかすよ松　信世

去年立そ二度はもなし春霞　未氏

つれふし一声河る松よかすり赤　盛興

大黒はつ地よわおはや福来菜　幸広

百年や百年もこるる君ら哉　正恒

二年立て青年角ら門　ぬん雲　雲仁

後て何ふ色やさらすす正水　為老

子代美為水を川　氣ら井外　好永

年ぬらの年よわ永し代ら城　利定

本信ハ春ぬ門田の稲穂孔　長業

年の年ぬ立ぬられやらふぬ城　重代

のとけさや人らやまつて稲ぬ　海恵

えらやいのらぬとそも稲の去　重信

のからなとぬらやらら祝ぬ年城　高尚

只行よ是ひと是ぬ年ぬ蕾　蝶子

信濃の関や濁よな氣なの濁去　同

心色すらとらぬる年や我とる色　同

蕾ら

打立ぬるも去色ぬや年の蕾　山人

ふくとふぶハらせらふんや年男　重信

思ぬさらハさらせらふんや梅苗　雪義

蕾色

去ら色や面を祝ぬするなの正　一信

山家元日　姫路

○奥山のおとろう毎とる雪清てみ地の長代の
　　まさよなへとや
○今朝うとは雪ふる春すら
　　ふらぬ山雪ハのとけき風さそひきて　自つま
○時て今朝ら梅梢は一花よなまれ〳〵まつ白ひ
　　きさよりすり友雪
○きのふ雪を雪ふ行ふさ家は花の袖はそ花
　　なる　東和
　　釈京
　　寄ふまつ立そもる雪はのふ〳〵朝そけさ
　　ちつきき

×春風高歌山蔵巳

立ふふ門雪を山ちん城下ル　友次
　　軍蒙
雪ハ色ハ山ちかへる雪ハ　同
たてたかふ京の地般や去年　宗安
　　ことし
君の代は久し高砂そ年おとこ　二子
　　軍蒙
いたいふ雪て行日や年たくる　同
天下今日世ひの道の吉書ル　ん和
雪といへたふきふふきたつ雪ル　宗長
　　きの姫ル　一仙
名追は風ふたの　たル　立斗
三代のとをたし　鬼姫ル
ヒ山ふもまとすんたり今朝の雪　不敢

立年はうきはの年　やはの表　右下
弟初や仕合そのきさ恵法師殿　正利
間の表所子作をおうしませ　稀き
為恵法師法名をみも寄稀作　重義
おろこひとうくはこそきの表作　重昌
摘れて寄をようも出ぬるの作　友次
七種を供云はまやゝ初年　正利
さいたんと初もてきせ為恵法　京名　吉釈
庶士も見初も汲やうとう　同
門よ市も立は第しや年始巻　同

七種

月

第巻

おそ松ふうらそそれ表り表　僧知
ろやい同者ひそ知あ表月　同

寛文四甲辰年京都第五

元日甲子

同おなじ御代よめる　冬梅　真室

梅ちるとみるまで門さす　乃枝　可頼

毎年たる柳　の雪はらはれて　政信

同

めつらしき心を移す花の　春　同

双六うちも　書初め　奇　真室

御料人ことし　琴　可頼

同

捨てたる年ふるそのおもひて　弓始　同

異見の俤はすゆる年年　政信

帳面の内外長閑にさつらひて　宗宅

第五番

梅奇やもちつる春の　隣里　同

元日

尺ちかきを　千歳　雪の老樹　西武

元方よ来鳴うぐひす　の彩　素白

笑の子もはちまきぬぎ　正伯

年徳の祝て志ゝん祝ひ寄　正伯
初子の小雲ゝ白孔雀代　西武
車海とく孔みのきのさゝめきく　素日

同

京の人ゝめつらかよもん花盛　同
ちさとの松もおのゝ西月　正伯
をそきにもゝらくとめ人の縁　西武

同

初雪の会うゝ歌よ初子哥　立圃
えゝ方の梅ようさ風うけ朝　好斗

毎月の市をゝらゝよ所立ゝく　昌房
ゝまゝゝや春立ゝ波のうゝ屋と花　常辰

同

冨士ゝ富ゝ冬ゝ庵ゝ庭のいけ　立甫
永日よ甲斐ゝ鶴の遊ゝ来ゝく　好斗

同

春はまゝ蛙子の祝ゝ日河ゝ　友貞
関出ゆゝうゝかすゝ　芳原　昌房
国ゝ遠海ゝ地ゝ祝ゝく　立甫

袖をも為れ梅よせん老の玄　宗彭
梅の花見と幸の　宗京
雪れば曲を酒乃さかなかな　宗隆
同十百立て雪を重ね
春たちも十能ふ能ふ　同
もたたへ所の花海乃きぬ　宗乳
袖ふれ所ゐも花を引つまて　宗京
同
取なへも紙のまよ　宗隆
同

まとり鶯者よ寄ふふ　宗隆
柳梅柳毎年ふ　宗乳
同
昔や梨れ乃せ玉ぬ乃玉　梅翠
雨つちかきまる所の書初　安宗
雪れ所山間を経ま　定宗
同
すふ所屋自然れ道理御飛　同
みをまま移よ　梅翠
屋形船あちこち風帆を上く　安宗

白の玉やかもひをよらぬ夕夏　あ重
なつまうう立まちにのんひり　宣重
塩竈をえ松のみとに春たまく　梅盛

元日

東吳やはもなら玉北えん夏　似空
はめきゑあまふ方は休保姫　宗逸
御殿はまよ鶴うて鶴なる北　重隆

同

天のそしやまをきうとゆの春　同
春はうゆくまとう傳よ常　似竜

かとともに花をもゆやいとふん　宗葉

元方郷の月らや四辰の市　同
まつ白弟物ハ大和との春　宗葉
雪の鳥もみ野ゆ鈴ゆまて　似竜

浮世第巳

ゆきの代の春や八角とふん四　未得
年を門の松そしきは今年　玄札

門前はまの地蔵ゝまつのうち　正恒
まや松ゝ入口ゝ　乱門の松　立志
たのしみはいちをまけて　菜花　文対
雪も梅の木の枝ゝ初ゝ　信先
俳諧をかゝるまつかゝめやつの松　同
年もたつ雪ゝつゝ　巻
たつゝ人もゝ　陳真
一さいのゝをかゝめやたゝゝ月　徳竹

かゝむせゝ初のひすゝ　山井
君か　家ゝゝ　乱世也かきり竹　心対
俳諧海老や　ゝ　ゝ　一巻
名古屋ゝ　名古屋ゝ　巻
名物や　菓　ゝ　ゝ　椒えゝ方　椒
つ雪はゝ花ゝ　二子
年初ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　友次
書初はすみを新　ゝ　ゝ　ゝ　吉親

寛文五乙巳歳

四年前ゟ当世之仕方 素堂

聖代ハ例たまき年ぬしを
世ゟ試筆ゟ悦し 可頼
去めゟ給い高麗ハ聖恩ゟて 西作
作保姫御たまゟ宿ハ春 同
湯殿ゟ為たまふ為桶 多宝
移流ハかゟいきめきのとめきて 可礼

室

茶

菅葉や心とかきて今歳 同
茶筅と茶ゟ筅たハ陽たゟく 正代
通家ハ粉茶ゟものせゟて 多宝
ゟゟハ吉ゟとゟゟ井戸車 暫酔
大ゟくゟゟ人参ハ下くく 木屑
七種と芝家ゟ今ゟ人 李蓮

コノ次次頁トソ次ノ次一面ニオトレアリ

ふる雨のやうに紫の木と花の葉　正伯
四方に（桜し）めくむ　西武
大平に時ちの御徳に　光正
百官を敬ふ　同
道に　元時寄
多所に老もの　正伯
あるに調ふ　西武
あるに水雑を　宗角
求に月を供に　雄丹（立新井）
はあらをもむ　宗虎
不鐘の春去春の今年の色　重亮
砂の　碧砕
池に伝蛙も　黄島
時に忘れ　流水覚
拝に　木庵
拝に　重亮
拝に　砕
物に　重亮
めに　砕
亀に　重亮
砂に　元情

[illegible]の色　康元
[illegible]　香炉
柳髪[illegible]　立陳
[illegible]の金
[illegible]　康去
[illegible]　香炉
川の茂[illegible]　西武
大[illegible]の花の去
松の[illegible]　蓮葉　之正
岩の松[illegible]　西伯

花乃春や衣氣[illegible]　宗甫
[illegible]の[illegible]
[illegible]　雄舟
おもひく[illegible]　宗隆
[illegible]　同
すゝえ梅に花さかせ　甫
[illegible]　舟
都[illegible]方代に去[illegible]　梅盛
君をやいさし[illegible]　宗意
春に飽をかすみ[illegible]

かとあるを世ちう音足神の表　あ宝
人重竹を竹　飛梅を　梅　梅　梅盛
宗近くすめ宮殿をの　宝重
民はため御代はため永は様に　同
みをもみやく小田乃をを口　あ宝
能角ん歌を姫角んこ年　は　梅盛
為て能を万葉は代春　ふるてき　五弱
かう縄てをはたるをいを和　長縄
先いをしかを先いえすに　同令

先ちのかきてはひをまはに　元慎
とるふるて物をれるふはを題　元房
まう宝世本ちん宝代春　正長
ちを今年を世ぬを新可之　重治
餅花て元に草を角ぬ　ぬ
まは色赤相て八重かを　来あ
陽を知て　をて二房塩　知鈴
七年を立弟　ひ　房長

萬葉ハ言葉ノ一
發會ノ例ヨリモ新
曲水ヨウノ吾国ニテ
初春ノ又初物ヨリ初子ハ　同
黄鶯鳴ハ餅ニ　花　紹玄
消殘　谷ノ　雪　生白
雪ハ年玉
春ノ年波ノ　同
春日ノ春ハ年ヲ重ネ　昌房
偽タツ春ヨリ春ヲ春ヲ　糸立

前例ヨリ吾国ノ例ヨリ初子ヲ春ヲ　同
節振舞　謡　百　紹玄
春ヲ歌ヨリ　少シ人座　生白
只如何ヤ多ヨリ　有　今德
初ツ今年ニ歸テ　仙口
年ヲ重ネ為ニ寛文ヲ　立下
寛ノ梅モ　年ヲ　雅閑　弦通
年ヲ　春ヲ　春ヲ　高霸
作保ノ世ノ大文ノ門ノ　松　岌

ものゝそなへ神代より幸もかゝる餘立
王まさりなりけるものこゝろ　宣親
世業より山ちかう書ふりぬる　力親
ものたちてたゞ朝夕宮ゐ　立圃
あはせ頃若とあつまふ　つ松
百年もゝ心ゝ頃よりかゝ　好子
神代の事あり一女三ヶ日　昌房
朋友ゝ移りて　常辰
そなへふるものゝ思ひ　立圃
　　好子

門ゝ家よりふるまひ
まさりゝ孔しりゝ法ふ玉園　東
物ゝ師ゝ家ゝ世ゝ　昌房
御代ゝ源氏ゝ初ゝ　立圃
あるゝ年ゝ　宣茂
生ゝ家ゝ　常富
鶯ゝ春生ゝ花ゝ種　流味
餘ゝ　同
ゝ学ゝ　宣清
　　常富

うこきなき御代ますかゝみ鏡餅　淡當
国土中すくた住　民はえの　流味
西は備後当代みなとせきのて　宣清
門春は何らけ根をまろ国　似元
あるおくた川てかくさう梅春　宗英
こゝろ風てめ限男須をたてもらん　似舟
春は年内にて陽玉君後保照御　同
先へしそかすめえんらし此町　似元
山雪は雪日何らうすきと雪千て　宗英

霞から未空を春で水流　同
大服は草はいきは花の香　似舟
鶯はてゑわもあはよりは来て　似元
梅は此雪といわ年はすゞ稿　言札
君はを久年きませぬて花はる　未得
鈍んみは梅て流く餘いは子春　卜養
かすらいそかは立も三川の始は　未則
くゑ翁はまをみきつい稿流の翁　岩城住
かさね門て吹く亦すぬの代は春　春

年徳や四のうきよの女郎　立志
ゑを形てあいみくらべや夏の月　春立
こゝろ筆や行あうりの松柏子　春子
ますゝの花をやとくらべ花の雲　正徳
かくまらて細うまやゝ京ふ西　調和
ゑを以てまよめるあしたゝ家　正恒
ちゝ年いとゝ分のたなうやゝ月雪　撰子
書初やつゝつきのゝ中老れ雪　春雲
人作よあゝんて知やわゝゝたひす　海雄

連歌

四季あまあく京やまうゝ　紙用
子里ゝ月も雪を解る山　玄心
すゝ出ゝ新年人の舟をへゝ　玄陳
今新ちゝや神代の春を清元　玄心
日乳光冨ゝうゝ除丸元　玄陳
形端ゝ雪あもゝふ風ゝて　紙用
京ゝ代やゝ春とつゝも初子日　玄章
春ゝ梅ゝゝ山やふゝ匂花の春　昌俊
ふゝ年のたゝ人をりや初ふ日　樣
立やゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝふすゝ　曾

いふ年翁のゆうしを拾く　幸右衛門
日のきのそしめや柿うゝ鞠の場　蓋
陽唐よそ〻の花曲ぬ　嵐　肩峰　曲水
時あれて宮よつく移り　雪をけて　路信　山井

殷代やまきこけむす雪うさも　同
なのゝ山紅紅　蓋　蓋
雪て酔うすみの河よ住ちれく　曲水
鶯てをゝ今年乙巳や俳り初　同
八つよ為ものとをうふ　呉　山井

曲撥の羅勢よ花を俳して　蓋
御書家を後に寄りて　一信
巻みの年や文てまはだ子代の雲
悲ひをの屋ゝ高の俳り俳　信海　去釈
こゞらはすゆうや柿のゝたう知　曲水
初まそよもや陽年ちんちゃ歳　信海　柳川
かまを竹のたいむ子代とへの弾り　信海　守洪

寛文六丙午年元日

真空

蓬莱の海や緑も深りんたら　　北之

其のほかの新の年　　越後

餅屋の後者よりくらべて　　同

門に柳ちりてつくく　　殿所

三ヶ日より礼者は移をふるいて　　之

月後の神の姿　　同

日数もうけ　　越後

仙家とも見つるき新の雪とけ　　同

宝

詩仙堂は春秋をもって　　西武

七夕の飾りもむかし　　文正

雕物の後より新をかりつけて　　伯

正月は何のためや　　同

雪のちらめく　　越後

ちらめく市の和風　　武

三夫の今新後新や年の年　　正

文方ヶ　　同

四海を花見の庭　　伯

世界の天地を動かす　　武

詩仙堂ヶ新

維舟

あらく年経　重高
其の姿を侍下は枝窓て　家隆
年山は去りて扇の水　同
紅も拾ふもうきうたびてあ　舟
新殿や雪を新ふらんふらん　冨
数の子代をとれの枝の新　同
加天の保は書うたて窓　隆
九重の雲のひるるまきびて　舟
書初の宿は梅も小字外　西中
今新の保は新の冨　川茅

山里を遍御は書の巻うけて　近知
東をうるとうるとうる冨冨　同
氷うるうるうる　初風　中
川冨の雪は柳の糸たる　茅
天うるうる雪もうる　桂縄　同
竹のすくるる代ハ氏書　知
約するあるを通しは　中
今新もるや保姫のおきる冨　似能
雪をるるふは人家　山角　宗莫
うるも氷の蟹の糸引て　似新

門寿や秋は別 波は其葉 仙船
四季立春也いそんくらちろ 宗
そしる摩小舟の縄を乗風 英
はせられ山や芽出葉きふの去 白川カ
不死のくすりと雪あくせ宮 船
花のかろよ釈迦をとを時き 宗
大仏やしろを立きふの去 立圃
を孫つき拝ふおきをひの古乳 友貞
ひをるは狂俳をうたいとちみて 考辰

須弥山の南をたつや芽の色 同
ひろ屋のとけさ今朝の霞の乳 市貞
学問の宮を引らけは寿をとけて
俳花や芽出葉ふまくむの枝 同
すもむる庭蕨はふ死の古葉 辰
考行は釈も言ふのくらふて 圃
俳俳姿や除夜をちふの中君 重吟
其意と梅の香は自ふ宮 重意
いろやはるり 梅をおりを拾て 可全

きふてにつの宮の百日き事始　文隆
花月の八月の はと作 遠　事作
梅ゝ見ゝ方のむ ゝと前もて　梅盛
能の国を根ゝとふや世のう梅盛
まゝもるんのり万代の八幡恒　この念
こきやゝうの名井まる事おいして　事作
流ゝ作よもゝ能るゝゝふの基　事の重
梅ゝ見ゝもやゝふつゝるゝもむ意基　この念
年徳や年ふ姫 年のもゝ神　梅盛

ふたつの木は者形ゝるゝやゝの去　梅盛
むゝゝゝ毎ゝの 九伝　竹寿
数答も見年人ものとめ見く　あ重
歌ふゝのよまゝもゝふ祝屋　同
むゝふ文方も陰ゝの高砂地　梅盛
松陰の梅も陽乱ゝまゝ作て　竹寿
竹まゝもゝつの年ゝゝふの基　「日」
ゝゝつ梅木の南枝花ゝく　あ重
当のゝまゝの色ゝ(せ)も竹ゝて　梅盛

ふる雪みるうまひ春のうきとをあ　ばせを
ゆけ郎も屋を笑ひやはちや　素得
春といそふ春ちうき代や国の春　立志
あらのてしをの心ぬしうき年男　西恒
すくなきや伝保姫の玉はき　為也
そそはつのきも孔とう老の春　卜養
なちまへや弦東はくおの秋の春　加成
こうきをいま雲道葉や春子と世山　一雪
おねさひ義朕ありうや年の年

むまやむ年もはもこの世も三代春　義元　為也
屋をうんちうみうちうや新暦　中俳
余寒ふはいうむうち梅のうちきて　山井
ちうをてもんのうけて数くは　同
まをきうはもき胴服　為也
影をう影寒ふ狩ようきうて　俳
年むやこの下春の宗俳法　同
結くあふ門春の徒　井
ものはのうちうのの世新老宗　為也

さ春は天のうしろかげをうつしたる
人のきゝし花やそなへしきふの雲　大雅
年初や先こゝろえしたゝらしよ　春信
梅魂はつゆ雪の立ち姿かな　一休
歌仙この立てあもれや雲代見　去田
冨士は霞よりほのぐらしめやたゝ月　利宣

寛文七
未　はるの上とやいとん後保姫殿　吉親

四月
申　はいるとおもふやうふの弓姫

四月
酉　今新立は前もうれやものの五

四月十日
戌　月もゝゆいて仰ふん後

四月十五日
亥　四月つゝて祝ふや後ものの

子　年は祝ふら世は元禄元年

丑　大和国の狩まく地ものや民の五

寅　月もゝ人ハとゝ京の五

丑

卯　世ゝうつてあるすゆのあめや若夷
辰　ゆゝおうらかてゝうれやゝ宮の玉
巳　みよかるゝうゝ世ゝまや付年たゝめ
午　ゝゝ年やたゝうめを見ゝぬ我の玉
未　万和の御ゝうゝ人ゝ門の玉
申　移ゝ玉ゝ根ゝりおゝ面の玉
　　長ゝ有やたゝゝゝゝてゝゝをたゝれ
　　世ゝ年やゝ山のゝゝゝゝゝゝる野老
　　れゝゝうゝて見れゝ前流の巻長や神代の祝
　　うゝゝゝゝきかけゝうゝて世ゝる玉夷

吉祝

丙　大根の玉のゝとゝゝ風の玉
戌　屠蘇の玉盃ゝ新て開く蛙のむ
亥　下臈の表者傘の開見ゝの今朝

寛文三癸卯正月吉写之 下里氏

下巻末に於て吉釈を書かなくて後写さるべき
一校をかゝ　一校
以後修正改出さるべき事なり　もとより
[illegible]